

2023 年 3 月 2 日

2022 年度聖路加国際大学大学院

看護学研究科課題研究

新型コロナウイルス陽性患者対応を
継続的行った看護師に生じた思いの変化と
それに対し求められる支援

Changes in The Thinking of Nurses Who
Continuously Cared for COVID-19 Patients
And The Support Required for Such Nurses

21MN012

木田千景

【目的】本研究の目的は新型コロナウイルス陽性患者対応を継続的に行った看護師に生じた思いの変化を記述し、求められる支援・予防策を産業保健の視点から考察することで今後の支援への示唆を得ることである。

【方法】感染症指定医療機関でない都内大学病院に所属する看護師3名に対し半構造的インタビューを実施した。逐語録を作成し、感染第1波から第7波の時間経過に沿って看護師に生じた思いを意味内容が共通するコードで分類し分析した。本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号：22-A041）。

【結果】看護師に生じた思いは＜COVID-19という未知のウイルスや疾患に対して不安や恐怖感を感じた＞等の【未知の疾患や未経験の看護への思い】、＜本人の希望と関係なく、感染者を見ることが決定事項とされており、納得できない気持ちになった＞等の【病棟の体制や職場環境への思い】、＜新しい人間関係の構築や他部署の人とのコミュニケーションが難しかった＞等の【病棟における他スタッフとの関わりへの思い】、＜自分自身の感染や同居家族への感染に対して不安や恐怖を感じた＞等の【家族への思い】、＜患者や家族に思うようなケアを十分に行えないことに葛藤を感じつらかった＞等の【患者や患者の家族への思い】、＜頻回に繰り返される感染拡大に対しうんざりし、慢性的な心身の疲労感やモチベーションの低下を感じた＞等の【先が見えないことへの疲労感】、＜技術が未熟な自分に無力さを感じ、部署での存在意義が見いだせなかった＞等の【自己効力感、自己不全感】、＜看護師と世間の人の間の感染予防の認識のずれにうんざりしつらかった＞等の【自分たちの感覚・認識とのずれに対する思い】の8つに分類され、第1波から第7波の各感染フェーズに整理することで、看護師が抱えるメンタルヘルス課題の傾向が明らかになった。加えてコロナ禍に看護師が得られた支援として、病棟内支援6個、病棟外支援8個、セルフケア4個の支援が挙げられた。またコロナ禍に看護師が必要と感じた支援として、スタッフの自由意思や自己決定の尊重、専門職への相談や他病棟のスタッフへの教育、平常時・災害時の人材育成・確保等11個の支援が挙げられた。

【結論】感染症災害発生時に看護師はCOVID-19や所属組織、患者やその家族、自分自身や自分の家族、世間の人等に、感染フェーズごとに様々な思いを抱いていることが分かった。加えて看護師は病院全体から該当部署、産業保健室等様々な部署や職種における支援を求めているということが明らかになった。今後は各医療機関が看護師のメンタルヘルス課題に向き合い、院内外の資源を用いながら部署や職種を越えて連携しメンタルヘルス支援を実施することで、病院スタッフのメンタルヘルスを維持することでメンタルヘルス不調による離職を防ぎ、ひいては医療崩壊の予防が期待できると考えた。